

混声合唱曲集「南風の歌」

うたの背景・作曲者の願い など

1. 旅の浜宿 浜千鳥節による

「如何にも沖縄」という前奏で曲が始まる。呑気で明るいイメージが先行するが、三回繰り返される歌の部分は次第にパートが絡み合うように混迷し、更にそれをピアノが煽る。やがて男女別、さらにオールユニゾンへと収束し、ついにひとつになり、あの陽気な後奏で曲を閉じる。この冒頭の曲に、現在の混迷から抜け出して元の穏やかな沖縄に戻って欲しい…という作曲者の願いが感じられる。

歌詞は、4番まである『浜千鳥節』から1番と3番が引用されており、旅立った自分と同じ境遇を感じる一羽の浜千鳥が寂しく戯れる姿を見て、或いは‘チュチュイナ(チュンチュン)’と鳴く声を聞いて、故郷の島に住む親に、そして愛する人に会いたいと、望郷の気持ちが切々と歌われる。

2. 谷茶前 たんちゃめ

譜の書き込みには「沖えらぶ島民謡による」とあるが、琉球民謡『谷茶前』は、本島恩納村の谷茶浜で行われる、今で言う「合コン」の男女の鞘当てを歌ったもので、本島から遙か離れて現在は鹿児島県の区分になる沖永良部島の民謡と記されているのは少し解せない。

16分音符で刻まれていたメロディがいきなり陽気な符点に変わる大胆さも面白いが、‘ナンチャマシマシ…’のお囃子部分が曲全体を煽って行く面白さには敵わない。このお囃子部分は、古くから日本各地で歌われているそれとは異質で、甘い符点と、良い意味で歯切れの悪い歌い回しが沖縄独特の雰囲気を出している。

歌詞自体は、大漁を予感させる浜の景気良い情景に加え、そこで漁をする逞しい男たちと、捕れた魚を頭に乘せて運ぶ陽気な女たちの姿が描かれ、ほのぼのとした沖縄ならではの風景が広がる。

アカデミーが1967年にパスポートを携えて渡った沖縄の演奏会では日本民謡のステージに沖縄出身の作曲家・金井喜久子の「ましゅんく」(伊江島の民謡)が加えられたが、「谷茶前」は福永先生がこの旅行に合わせて特別に編曲をされ、各地の交流の場で歌われたのであろう。

### 3. 愛よ かなよ 沖縄本島民謡

「かなよ」つまり「愛しい人」に対して「もっとはっきり愛を見せてくれないか」と、もどかしい気持ちを歌っている。

沖縄では、女性が好きな男性に自分の気持ちを手拭いに託して渡す風習があるという。手拭いと言ってもいわゆる日本手拭いのようなものでなく、1万円を超す高級品もあるらしく、洒落たハンカチに近いイメージではないか。

しかし貰った男の方は、「手拭いなんか貰ってもなあ、それよりはあなたの愛が欲しいのさ」というオチで終わる。

### 4. 砂持節 しなむち 伊江島民謡による

戦禍を被ったのは沖縄本島のみならず、本島西側、美ら海水族館を背にしてフェリーでものの30分の伊江島も例外ではない。自然が広がるその島は一皮肉にも基地に適した地形ゆえ—アメリカ軍占領の格好の餌食となってしまった悲劇の島でもある。伊江島全体の地形は平安時代の女性の帽子型と言えは良いだろうか、真ん中に丘が一つ、あとは平地が広がり、本島と反対側の海岸線は30メートル程の絶壁が続く。その小さな島を斜めに横切る滑走路は離着陸が容易であったため、戦後も暫くはアメリカ軍の占領地となり続けたのである。一方、本島側の海岸線はやや栄えており、ある時500発もの弾薬を積んだ船が接岸に失敗し、見物に来ていた多くの島民のうち100人近くが犠牲となったという悲劇も起こった。

更に、土地は決して肥沃ではなく、作物上納のため割り当てられた土地を開墾するのは並大抵ではなかったという。島民はしかし何とか作物を上納するため、‘阿良(アラ)’の浜砂をすくっては自分の土地まで運び、何とか芋くらいは採れる土地にしなければならなかった。砂を取りすぎたため、打ち上げる潮で住居が被害を受け、やがて砂を運ぶことさえも禁じられてしまった。それでも運ぶ者が絶えなかった為、役人は番人‘西泊(イリドゥマイ)’を置いた。その見張りに対して、何とか見逃して下さい、とお願いするさまを歌ったのがこの曲の1番の部分である。

島の中心辺りに位置する‘真謝原(マジヤバル)’で採れた芋は厳しい育ち方をした為か一つの根から三籠分も採れたという。その芋を洗うため少し離れた‘赤嶺(アカンニ)’という池までせせと運んだ。これが2番(元は4番)の歌詞に当たる。元の3番は多少俗っぽい歌詞で、インゲン豆も取れるがその匂いは昨夜一緒にいた遊女の臭いがする、などと歌われる。

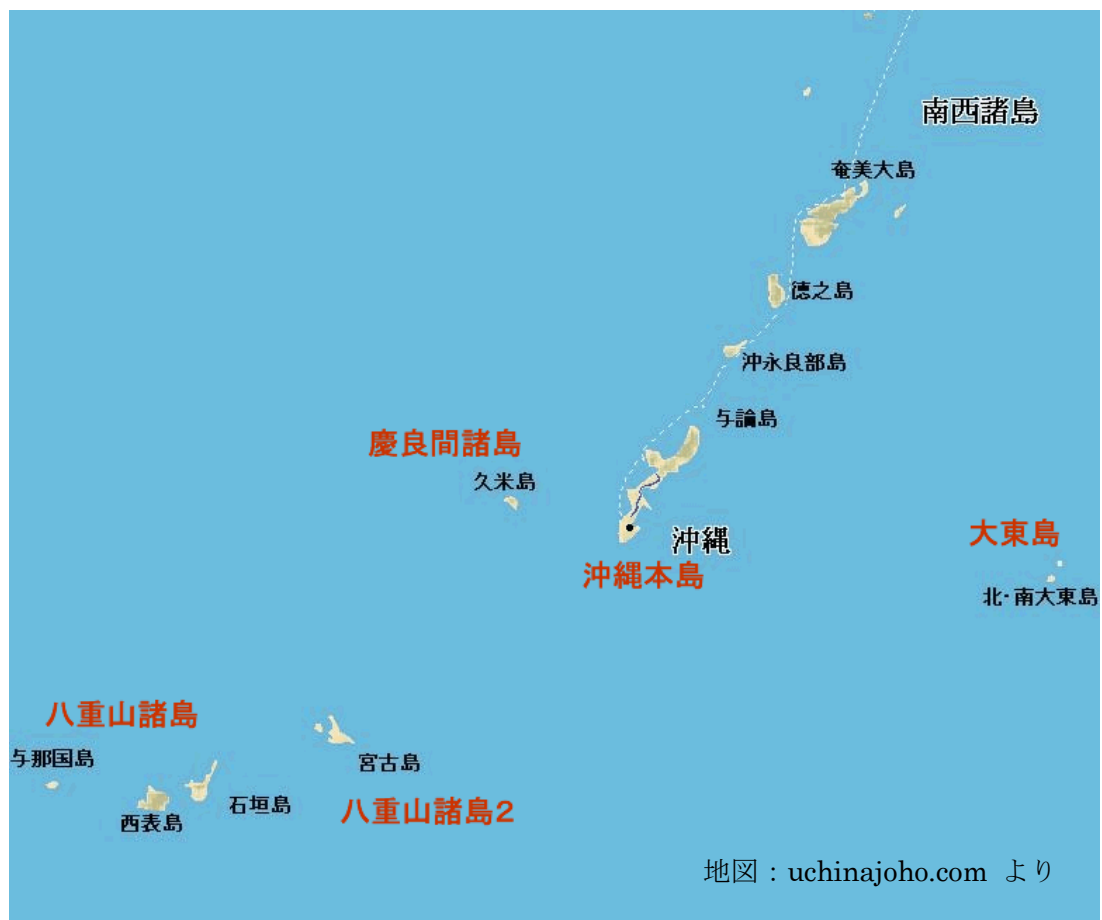
何れも悲劇を打ち消すかのような歌詞とメロディの陽気さが、なおさら悲劇の歴史を浮き上がらせている。

## 5. 終曲 子守唄 南風に乗せてうたえる

作曲者は、このフィナーレを、沖縄を離れ本土に近づく風に乗って奄美大島まで吹く、と閉じた。やや疑問に思うのは、確かに奄美諸島には向かうが、徳之島から沖永良部島へと続く曲運びは、位置的には沖縄本島にまた戻る形となるところである。そのことが、結局、日本列島に馴染めず沖縄へと戻って行く、在るべき所に納まっていくという安堵につながるのだろうか。

曲はいくつかの島の子守唄で構成され、陽気に踊り出すようなイメージではなく、沖縄の陽気さが、表面的にはその悲しい歴史を感じさせないのと同様、死者への弔いよりは、むしろ未来ある子ども達に託すように進んで行く。例えば2曲目の子守歌『東里真中(沖縄本島より遙か西に位置する宮古島)の子守唄』その17番までである歌詞は、生まれたその地で土地を耕し、蜜柑(ミカン)を育て、その実がなるように子どもたちを育てて行こうと歌う(「南風の歌」では後半部分の歌詞は省略されている)。子ども達に未来を託し、これからを生きていこうとする沖縄の人々の意気込みを感じる。

作曲者・福永陽一郎はこの終曲に、沖縄の未来を託したのではないだろうか…。



まとめ 今、沖縄を唄うにあたり

曲全体の構成は極めてスペクタクルだと思う。

1曲目『旅の浜宿』は望郷歌、2曲目と3曲目(『谷茶前』『愛よ』)は恋歌(原曲は何れもハイテンポなカチャーシーというラブソング)、4曲目(『砂持節』)は労働歌、5曲目は子守歌、という形で構成されており、変化に富んだ沖縄地方の民謡を様々な角度から紹介してくれる。

しかし、この「南風の歌」は単に採譜した沖縄民謡を並べた訳ではなく、最も重要な点は西洋音楽との融合と反発を取り入れているところにある。それは、音階から先ず明らかに違うことを、敢えて馴染ませるかのような——例えば沖縄音階の一つだけを西洋風にして融合を図ったり、またオペラのようなオーバチュアを挿入してそこに奄美地方の子守歌をぶつけてみたりと——作曲者の邪心に近い冒険心を感じる。

また、沖縄音階特有の増4度(ドとファ#の関係)や長7度(ドと上のシの関係)を曲中で暗示的に使っていたり、悲しみの調性と言われるホ長調をフィナーレに持ってきたりと、主張のはっきりしたチャレンジが随所に見て取れる。

作曲者が伴奏楽器にピアノを選んだところにも、敢えて西洋音楽との不調性を表したかったのではと考えるが、残念ながらピアノだけでは沖縄音楽側のパワーと釣り合わないと思った。そこで、ここは西洋に三線という東洋の楽器をぶつけることで、作曲者の趣旨がより引き立つのではと、あらぬ予測を巡らしてみた…。

三線はそもそも西洋から中国を経て日本に伝わり三味線に形を変えた楽器である。つまり元々一つだった音楽がその土地に根付いて融合と反発を繰り返しながらお互い進化し今に至った訳だ。沖縄だろうが西洋音楽だろうが世界の人々の心の奥に響くことだろう。それは例えば聴く人の思い出のシーンと重なったりすることでその曲の重みが変わったりすることがあるが、懐かしさや愛おしさを自分が聴いた歌に感じるかどうかは、これは西洋だろうが東洋だろうがあまり大差ないと思うのである。

だから、西洋とか東洋とかごたくを並べないで、冒険心に富んだこの策略に敢えて素直にはまり込んで、素直な気持ちで沖縄音楽を楽しんでみたいと思う。

2014年6月

尾崎 徹

1984/85年の演奏会プログラムより—その1

福永 陽一郎

法政アカデミーは沖縄に演奏旅行をしたことがある。まだ沖縄がアメリカの軍政下にあった年代である。そこへ行くのにパスポートとヴィザが必要であった。沖縄のことは一朝一夕に語る事が出来ない問題である。古代史は私の趣味の題目のひとつだが、日本を単一民族国家だとすることに反対なので、沖縄を日本の一部と割り切ることに賛成しない。むしろ、ドイツ人とオランダ人の間の共通点と異質性に似た関係ではないかと考える。つまり国家としては独立していて良いのではないかと、という意見である。

音楽について見てみても、伝承されている民族性は、いかにも別々のものである。従って、私が沖縄民謡に接するとき、まず一番に意識されるのが音階の違いであり、興味はエキゾチックな気分としてたかまる。その差異は、イングランドとスコットランド相互間の異質性より、もっと明確である。

さきに触れた沖縄演奏旅行の際に、「谷茶前」を編曲したのが、私のこの種の作業の始まりであった。その後“君を知るや、南の国”(ゲーテ)といった憧れがふくれ上がり、かなり詳しく資料を漁った後、沖縄民謡に取材した合唱曲を書いた。「浜千鳥節」「谷茶前」「かなよ(愛よ)」「砂持節」「安里屋ゆんた」、それから幾つかの子守唄を合成した「フィナーレ」から成っていた男声合唱のための曲集を、今回、現在の法政アカデミーの学生指揮者、比嘉君が沖縄出身なので、彼のために混声合唱用につくり直した。再編曲にあたって「安里屋ゆんた」を割愛した。なお「フィナーレ」に使用されている子守唄は、「ていんさぐぬ花」「あかずざとらんなか」そして少し本土に近づけて、「奄美大島の子守唄」(沖縄の音階と日本の陽旋法とが混合している)の3曲である。ひとつだけ沖縄以外の曲を挿入したのは、私個人の思いとしては、南から吹き寄せる風に乗せて、人の情もまた私たちに近付いてくるのだ、という思い入れがはたらいた結果である。

1984/85 年の演奏会プログラムより—その 2

24 期学生指揮者 比嘉 徹

浜千鳥節から、旅の浜宿は、旅に出て浜辺に仮泊りする者の旅愁を唄いあげている。浜千鳥(チジュヤー)が、浜でチュイチュイ鳴く姿を自分に照らして哀調せつせつとした旋律で唄いおえる。谷茶前では、青年が魚を捕りに、娘たちはそれを売りに出た、などという漁村の生活がコミカルに唄われる。この「マンチャマシマシー」以下の囃子は「それはよいよい、そいじゃ娘さん連れだって行こうよ」というようになり、一日の仕事を終えて毛遊び(もうあしび)—昭和の初期までであった、村落共同体の未婚の男女が交際する場。夜、野に出て歌をよみあったりする沖縄独特の世界である—を心待ちにしているといえよう。愛よ(かなよ)も、毛遊びでの愛情の交換を唄いあげている。「かな」は琉球方言でいう愛人、いとおいしいお方の意である。手巾(ていさじ)という織布に女の魂をこめて相手に贈る、という沖縄古来の習俗を示す内容。砂持節(しなむちぶし)は、沖縄群島伊江島の砂運びの労作唄。囃子の「ゼイサー」は砂を持って搬ぶときのかけ声を表している。終曲の子守唄には、琉球旋法の旋律が美しくよく整う「ていんさぐぬ花」、宮古島の子守唄、奄美大島の子守唄などが盛りこまれ、歌詞も旋律もだんだん琉球を離れ九州に近づく。

昨年 3 月の九州演奏旅行における「おてもやん」「稗搗節」「こしき島舟歌」などの九州民謡から、さらに南西諸島への民謡のレパートリーが広がることになる。

この「南風の歌」の曲集は、私にとって生涯心に残るものであり、お忙しいスケジュールの中編曲をして下さった福永先生に、心からお礼申し上げます。また、伴奏をお引き受け下さった久邇先生、貴重なアドバイスを下さった大久保先生に、厚く感謝申し上げます。

今宵、南の風に乗せて琉球の歌の心を皆様のお届けできれば——と願いつつ歌います。

2014/06/08

構成まとめ：関由紀子@ライブラリ

協力：7 期 8 期 24 期 25 期の皆さん